

優秀賞

「あなたと生きる」

岩手県立釜石高等学校3年 吉田 亜耶香

私の母は、看護師の職に就いている。そのため、母の勤める病院で患者さんに会う機会が多い。患者さんと会話している母を見ると人との関わりは素晴らしいことだと改めて感じさせられる。人は、一人では生きていけない、誰かの助けがあって生きていけるのだ。

私は、小学生の頃、とても貴重な体験をした。母の病院に忘れ物を届けに行った時のことだった。母の勤務先の病棟に行くのは初めての経験で、一体どのように患者さんに接しているのか、ドラマのような職場風景なのかなど様々な疑問を抱いていた。しかし、病棟に入ってみた瞬間、目に飛び込んできたのは想像していた光景ではなく、手や足を自由に使うことが出来ない、重症児病棟の患者さん達だった。私は、間近で見るのは初めてで声を出すことが出来ず、正直「怖い」「早く帰りたい」と心の中で思った。小学生の私には衝撃的な出来事だった。しかし、母はいつも通りの笑顔を私に向けてくれた。

私の行動や表情で勘付いたのか、夜に仕事から帰ってきた母は、私に大切な言葉をくれた。「あの患者さん達は、あなたのように学校に登校して勉強することも出来なければ、外で遊ぶことも出来ない。だけど、一生懸命毎日を生きている。あなたが手や足を自由に使って毎日暮らしているのは、幸せなことなのだよ」と。私は、障害者の方々に「怖い」と思った自分に腹が立った。自分は、なんて最低な人間なのだろうと感じた。患者さんを一生懸命支え、考えている母を知り、私は母のことを初めて誇りに思い、尊敬した。それと同時に、私はこの健康な体を使って人の役に立ちたいという感情が生まれた瞬間だった。

中学生になり私は、老人ホームへ行き、ボランティアと職員の仕事の内容を学ぶ体験をした。高齢者の方と歌を一緒に歌うという企画で、歌を歌っていると、目に涙を浮かべて笑顔で歌っているお婆さんが見えた。私は、お婆さんの笑顔を見て、今日この場所に来てよかったと思った。笑顔は人との繋がり的一部分なのだと学んだ。私は、以前、母に「看護師のやりがい何か」と聞いた際、母は「患者さんの笑顔を見る度に、やりがいを感じる」と答えていた。私は、母が常日頃感じている思いを感じることが出来て、とても嬉しかった。

高校生になった私は、ボランティア活動に参加した。そのボランティアは、障害者の方との関係を深めるという内容だった。私は、また同じことを思うのではないか、障害者の方との関係を深めることは出来るのかと思い不安と緊張感を抱いていた。

交流場所に到着し、実際に会ってみたが、やはり私は、「怖い」という感情を抱いてしまった。この、ボランティア活動には、私の部活の先輩も参加しており、先輩は笑顔で「大丈夫」と言って私をリードしてくれた。私は、本当に駄目な人間だと思い、自分を責めていた。すると、一人の障害者の方が私の腕をしっかり掴み、正常に歩けない体を、一步一步踏ん張り、歩こうとする姿を見て、私は感銘を受けた。

私は、頼りにされていると分かったときに嬉しさと「怖い」と思った感情に対し、申し訳ない気持ちでいっぱい、涙が出そうになった。しかし、障害者の方の笑顔で私も自然と笑顔になっていった。笑顔は、人を助けるための一番の治療法ではないのだろうかと思った。

私は、将来、人の役に立てる職業に就きたいと考えている。医療福祉の現場で学んだことは、人と人

とが支え合い、共に助け合っていくことが重要だということだ。共に生きていくためには、相手を信じることも大事な要素である。母から学んだことを活かして、次は私が、医療福祉の現場を担う一員になれるよう、これからは繋げていきたい。そして、尊敬している母のような立派な人を目指すために、人の役に立ち、誰からも好かれ、笑顔を絶やさぬような人でありたいと思う。